## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	松井清著 貿易理論の研究
Sub Title	
Author	岩田, 仭
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.1 (1939. 1) ,p.133(133)- 139(139)
JaLC DOI	10.14991/001.19390101-0133
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390101-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

業を取扱つて居ない。 なる闘聯を持つか等の問題は、夫々他の學問の分野に屬する研究題目である。地理學的研究は實際の移民事業が如 ない。將來の技術が如何に變化するか、政治上及び經濟上に如何なる變化が起こるか、而してそれ等が移民と如何 件及び現在の技術を前提とし、政治的・經濟的障碍を無視したのであるが、これは地理學的研究の性質上やむを得 ては、國內移住がより一層緊切な場合がある。また本書は各國の人口收容力を考究するに當り、主として自然的條 としても、本書の價値を認めることが出來やう。然し乍ら他方に於いて本書は,獨逸や伊太利に於ける國內移民事 に、本書の價値を先づ認めねばならぬが、同時に或る程度まで各國内に於ける今後の經濟的發展の基礎を示すもの 一斯くの如く當面の世界的問題の解決方法として國際的移民事業が大なる重要性を持ち得ないことを明かにした點 Affairs, New York. 發行、丸善賣價十二圓)(昭和十三年十二月二十七日) 何に行はれるかを決定する基礎の一部分を明かにし得るに過ぎない。 しかも國際的移住が著しく制限され、また國內邊境地域の武裝が重要視されて居る現在に於 (vii+380 pages. Council on Foreiegn

## 仏井清著「貿 易 理 論 の 研 究

岩田田

刃

オイレンブルグ、レプケ等の「本位制の差異」の三者である。 の國內的移動性と國際的移動性」の區別、その亞流とも看做されるシッジウィックの「運送費の差異」、更に轉じて 云ふ事が出來る。其處で檢討の爼上にのせられてゐる見解は、リカード、ミル、ケアンズ等古典學派論者の「勞資 成立に關する基本的問題であるからして、著者が本書の序說として最初に論及されてゐる事は適宜の處置であると の決定に闘する問題である。之は從來國家の概念規定と云ふテーマの下に屢ぇ論ぜられた。而してそれが貿易理論 れと如何なる點に於て異るかを認識する事に依つて、貿易理論が獨立の分野を持ち特殊理論として成立するや否やれと如何なる點に於て異るかを認識する事に依つて、貿易理論が獨立の分野を持ち特殊理論として成立するや否や 多の論作を發表され、先般ハーバラー著『國際貿易論』の翻譯を岡倉伯士氏と共に刊行された學究の人である。 將來性ある事を考へる時、喜ばしき限りである。此處に紹介せんとする「貿易理論の研究」の著者松井清氏も旣に幾 常に運滯せる今日誠に慶賀すべき事である。殊にそれ等研究が主として少壯學徒の手に依つてなされ、その發展の常に遲滯せる今日誠に慶賀すべき事である。殊にそれ等研究が主として少壯學徒の手に依つてなされ、その發展の 本書は先づ「貿易理論の前提」の問題から始められてゐる。貿易理論の前提とは、國際間の交易が國内に於けるそ 近年我國に於ても貿易理論の研究が漸次盛んになりつゝある。貿易現象の實證的分析に比しその理論的研究が非

松井清著「貿易理論の研究」

きない事を認めてゐる。 第二十九卷第八號「國際價格理論」十〇十十二頁參照)此の點に對する論難は、マクレオッド、レスリー・ベジョッ 派貿易理論の根本的前提の吟味として『旣に再三再四取扱はれた所である。筆者も亦甞つて此の點に觸れた《本誌 上。ホブソン・ショッレル・ルソー、ラフリン等々枚擧に遑なく、古典學派論者自身も亦それが單に程度の差に過 古典學派の云ふ勞資の移動性に關しては、或は古典學派經濟學の支柱たる勞働價值說の吟味として、或は古典學

第三號 正統學派貿易理論」 二四—五頁)示した事がある。 シッジウィックに對するエッヂワースいバステーブル等の論筆が興味ある事も筆者は別の機會に(本誌第二十九卷 題としてゐる限り多言を要しない。運送費の問題は寧ろ古典學派の國際價値法則の修正乃至破壞として重要であり、 次いで運送費存の在に依つて國際貿易を特色付けんとするシッジウィックの説であるが、之亦単に程度の差を問

構成に於て古典學派理論と對立するオーリン流の所謂近代理論の立場を採らんとしてゐる事は容易に理解し得る所構成に於て古典學派理論と對立するオーリン流の所謂近代理論の立場を採らんとしてゐる事は容易に理解し得る所 を聞く事が出來ない。從つてそれに付て多くを語る事は不可能であるが、たゞ右の章句から、著者がその貿易理論 て認識する事が出來る。」(二頁)と規定してゐる。併し乍ら我々は生産條件の意義に關して著者からそれ以上の說明 に著者の理論體系の理解に際して重要である。著者は、「生産條件は具體的には技術及び生産要素の價格を標識とし 的不均等なる貿易理論の前提之であると云ふ。其處で此の點を吟味する事は、次いで述べられる本書の全內容並び 論ずるに當つては妥當性を有する事を否定しないが、本質的なものは他にあり、 世界貨幣土地金の存在を擧げて之を一蹴してゐる。結局著者の主張する所は、之等區別が何れも表面上の諸現象を世界貨幣土地金の存在を擧げて之を一蹴してゐる。結局著者の主張する所は、之等區別が何れも表面上の諸現象を 著者も亦右の雨者が何れも本質的な點を突いてゐない事を認め、更に第三の「本位制の差異」を强調する學說をも、 即ち生産條件の國內的均等と國際

否何れを問はず貿易理論を考究せんとするものは先づそれに對して必ず何等かの解釋を下さなければならない。本 二者は貿易學說史上我々の持つ最初の理論體系をなす古典學派理論の根幹を構成するものであり、それに對する賛 その價値思想からして一般的政策判斷の基準を與ヘニ自由貿易主義の論據として意義を有して居た。併し乍ら國際 代理論としてオーリン、ハーバラーを、又國際價值論に關しては、⑴古典學派としてミル、⑵新古典學派としてマ 書に於ては比較生産費説に關しては、(1)古典學派としてリカード、(2)新古典學派としてタウシッグ、ヴァイナー、(3)近 理論の到達した立場は純粹な均衡思想であつて、その内容は單に與へられた國際價格形成の機構を、一般的均衡關係 價格理論の發展方向は、均衡思想への接近であり、かゝる因果的價值思想よりの離脫であつた。かくて近代的貿易 と云ふ二つの姿に於ける因果的價値思想に依つて基礎付けられた事がある。その何れの場合に於ても、貿易理論は く結論した事がある。「古典學派貿易理論―國際價格理論はその學說史的發展過程に於て、客觀的價值と主觀的價值 てゐるやうである。筆者は且つて「貿易理論の發展と貿易政策原理」(本誌第三十卷第十號)なる一文を草して次の如 何等かの因果的價値思想に依り比較生産費說の改修を試みんとする者を新古典派とし、更に因果的價値思想の放棄 比較生産費説を支持して之を勞働價値思想に依つて基礎付けんとする者を古典學派とし、その欠陷を認めつゝ然も してゐる。之等諸學派の區分は通說であり、又その代表者として學げられた者も亦大體に於て穩當である。筆者は、 さて本論第一編貿易理論の内容をなすものは、比較生産費說、國際價值論並びに資本移動の近代理論である。前 シャル、エッヂウワース、ヴァイナー、③近代理論としてバローネ、オーリン等を擧げて、その學說史的發展を說明 相對的均衡思想に依る新理論の建設を企圖する者を近代理論と看做してゐる。著者も亦之と同樣の見解をとられ

點では古典派と同様であつた。然るに近代理論に於ては貿易條件を決定するものとしての國際價値論の役割は著し 新古典派も古典派とは岩干の相違を持つてゐるが、而もなほ貿易利益分割の指標としての貿易條件を重視してゐる 章に於ける課題は前章の課題の補充として、國際價值論は先づ古典派に於て極めて實踐的な性格を以て現はれた。 く輕視され、國際價値論は國際間に於ける商品交換比率決定の機構を說明すべき理論的使命を有するに過ぎなくなく との合一を主張するに對し、近代理論はこの說に單に理論的使命を與へてゐるにすぎないのである。(二六頁)三本 本的問題に關して筆者は全く同感である。曰く、「古典派や新古典派が比較生産說に於ける政策的使命と理論的使命 定する一般的原理としての意義を放棄しなければならない。J(TITO頁)と。斯かる見解も亦本書に於て採られ、基 に依つて客觀的に分析する事である。若し貿易理論の内容が斯くの如きものであるとすれば、貿易政策の方向を決

た事に著者が論及されたならば、一層その完璧を期す事が出來たのではないかと愚考する。 ッヂウワース、マーシャル等が一應主觀的價值思想に依つて著者の云ふ理論的使命と政策的使命との合一を企圖し たゞ筆者の見解からすれば、客觀的價値思想たる古典派理論から、均衡思想たる近代理論への過渡期に於て、そ

(筆者は簡單に書評を試みた事がある。本誌第三十卷第十二號「國際資本移動の問題」)・又近代理論の特質を側面か は貿易理論成立の根本的前提設定の爲めに否認された所であるが、近代理論にあつては寧ろ進んで之が採り上げら としてイヴァーセンの著書「國際資本移動の理論」に依つて論ぜられてゐるが、未だ我國に同書の充分な紹介なく 本論たる貿易理論の最後は資本移動の近代理論に當てられてゐる。國際間の資本移動の問題は、古典學派に於て 我々は其處に兩理論の間に、歴史的背景並びに理論構成の明瞭な區別を見出し得るのである。本書は主

ら理解する意味に於て、讀者を稗益する所少くないと信する。

は、著者の企圖せる古典派理論と近代理論の區別は一層明白に示し得たであらうと考へる。 せる如く、欲を云へは著者が更に一步を進めて貨幣に闘する基本的問題に迄突進んで、その見解を展開されたなら 國に於て未だその研究が不充分なる時、右の著者の論述は我が學界に多大の刺激を與へられる事と思ふ。たゞ前述 る。貿易理論の分野にあつては、最近近代理論の擡頭と共に國際資本移動がその中心的テーマとなりつくあり、我 (三)國際資本移動の機構に關する近代理論であり、前述せる國際資本移動の問題の詳論が試みられてゐるに過ぎな 對立を示しつく、古典派理論と近代理論との對立、特に前者が實践性(政策的使命)を有するに對して後者に於てはそ 理論との論理的關係」参照)従つて著者が貿易の貨幣理論なる章を設けられた事は、著者の理論的用意の周到さに敬 れが完全に失はれてゐる事を明示せられてゐる。更に最後にハーバラー並びにイヴァーセンの見解が付加されてゐ 服する次第である。併し乍らその内容は本來的な貨幣理論ではなくして、(一)國際支拂機構論、(二)賠償支拂理論、 である。古典學派貿易理論の内在的批判、並びに如何にして近代理論へ移行するか等に關しては、彼等の貨幣理論 事は、その理論的性格からして當然の事であり、從つて其處で採られる貨幣理論の吟味は特に重要性を有するも 第一編貿易理論に次いで第一編は貿易の貨幣理論である。古典學派理論の特色の一つが一種の物々変換論である • 其處にはイヴァーセンの見解に從つて、ソーントンとリカード、ミルとパステーブル、ケインズとオーリンの 立場をその貿易理論との關係に於て檢討する事に依つて明白にされる。(本誌第三十一卷第七號「貿易理論と貨幣

して述べられて居る。其處で結論として、序論の紹介の際に示した如く著者自身近代理論の陣營にあり乍ら「正し 以上の如き本論の内容は何れも古典派理論と近代理論の對立を、貿易理論と政策論との關係と云ふ觀點から一貫

れてない。 題である。(本誌第三十卷第十一號の筆者ハーバラー紹介參順)著者も亦右の問題を提起したのみでその解決を示さ 如何にして解き得るか。ヴァィナー、 されなければならない。」(同頁)事を認め、共處に「貿易理論の現代的課題」を見出して居られる。然らばその課題は く理解された近代理論に於ては、理論と政策論とが完全に分裂してゐる。」(二三六頁)事、更に此の「分裂は止揚 ハーバラー等幾多の論者の努力にも拘らず、然も尙ほ依然として未解決の間

典學派に於けるが如き意味の兩使命の結合は、複雑な價格經濟が透つた物の經濟への移行した場合のみ可能であ典學派に於けるが如き意味の兩使命の結合は、複雑な價格經濟が透つた物の經濟への移行した場合のみ可能であ 使命であつて、價格現象の詳細な分析による相對的ではあるがより複雑な政策判斷は近代理論に於て反つて可能とう。近代理論が喪失してしまつた政策的使命は、飽迄古典學派の意味せるが如き絶對的ではあるが單純なる政策的 なるのである。その意味で近代理論に於ても旣に理論的使命と政策的使命は止揚されてゐると考へられる。たゞ古なるのである。その意味で近代理論に於ても旣に理論的使命と政策的使命は止揚されてゐると考へられる。たゞ古 と云ふ單純素朴な政策的判斷が不可能である事は當然であり、寧ろそれに滿足し得ないと云ふのがより適切であら だけ、 (本誌三十卷萬十號『前掲論文』八〇頁參照)從つて理論の展開につれて價格の構成,變化は漸次詳細に分析される事 となる。而して、價格現象が社會を構成する諸要素に及ぼす影響は複雑であり、その事情が明かにされゝばされる は、何れも個人主義原理に立即せる事は云ふ迄もない。その限りに於てその中樞的課題は價格現象の解明である。 最後に之に闘する筆者自身の見解を述べて本書の紹介の筆を擱く事とする。從來我々の持つ經濟學特に貿易理論 政策的判斷も亦複雜化せざるを得ない。故に最も進步せる近代理論に於て、 自由貿易政策が保護貿易政策が

(附言)。著者松井清氏は本書執筆半ばにして「臨時召集」の恩命下り「研究生活に歸るのは恐らく近き日には來な

學界に健筆を揮はれる日の一日も早からん事を待望する次第である。 いであらうとの豫想」の下に蒼惶の中に本書を纏められたものであると云ふ。同氏の武運長久を祈ると共に、 (一九三九、一、八稿)

松井清著「貿易理論の研究」